



みなみそうや なかどんべつ
南宗谷消防組合中頓別支署
すみや
炭谷 貴博

中頓別町立中頓別小学校・中頓別中学校のみなさんにご協力いただき、無事連載を終えることができました。誠にありがとうございました。



写真1 講習内容を打ち合わせます



写真2 消防に準備を依頼します



写真3 心配蘇生法を学び、その指導法も教えてもらいましょう



写真4 携帯電話からの119番についても教えてもらいましょう



写真5 授業等で使用する校外施設のAED設置状況を教えてもらいましょう

連載
第12回
(最終回)

学校での講習(先生向け)

みなさん、こんにちは。昨年4月号から始まった本連載も、最終回となってしまいました。今回は、私が行っている先生向けの講習でのポイントや工夫していることについて、解説したいと思います。

(1) 事前打ち合わせ

講習会を行う際、前回の児童生徒向けと同様に事前に打ち合わせを行います。学校で、講習日、講習場所、受講者数、講習内容をある程度決めて提示すると、スムーズにすすみます(写真1)。

(2) 道具の準備

道具の準備についても、前回の児童生徒向けと同様です。講習会で使う訓練用の人形やAEDは消防から借ります。学校にある備品を消防側が使わせてもらうこともありますので、消防から依頼があった場合は準備をします(写真2)。

(3) 指導方法

先生方自身に心肺蘇生法を学んでいただくのはもちろんのこと、先生方から児童生徒に指導することもありますので、その方法も講習内容に加えてもらいましょう(写真3)。

(4) 救急車の呼び方

学校に救急車を呼ぶ場合の連絡方法、消防へ伝えるべき内容を教えてもらいましょう。また、固定電話から119番通報した場合と携帯電話から119番通報した場合の違いや、地域によっては最寄りの消防へ繋がらず代表消防本部へ繋がる場合もありますので、119番通報に関する説明・ポイントも教えてもらいます(写真4)。

(5) AED 設置箇所の確認

AEDの設置・普及が進んでいますので、周辺地域のAED設置場所を挙げてもらいましょう。学校内の設置場所確認はもちろんのこと、校外活動・授業で使用する施設(プールや集会施設等)のAED設置状況や設置場所も教えてもらいます(写真5)。

(6) 事例

救急出動で心肺蘇生が必要だった事例を紹介してもらい、実際に心肺蘇生が必要になった場合の参考にします。事例から学べることは予想以上に多いと思います。



写真6 実技を中心にすすめてもらいましょう



写真7 目線の高さを受講者に合わせて指導します



写真8 体の動きを使って指導します

(7)実技を中心に

見て・聞いて理解したつもりでも、実際にやってみるとなかなかできないものです。児童生徒向けと同様に、実技を中心に講習をすすめてもらいましょう(写真6)。

(8)成人教育

大人向けの講習会では「成人教育」の技法を取り入れている講師(消防関係者)が多いので、ご紹介します。成人教育とは、従来、学校や職場で行われている「一方的に教える」方法ではなく、受講者と指導者が同等の立場で共同作業を行いながら学習する方法です。

①アイコンタクト

指導者と受講者の目線の高さを合わせます。受講者が座っている場合には指導者も座って、目線の高さを同じにすることにより、同等の立場で学習している雰囲気を作ります。(写真7)

②ボディーランゲージ

身振り手振りを使い、言葉だけでは伝わらない部分を補います。こうすることで、コミュニケーションの幅が広がります(写真8)。

③体験型学習

人形を使って、実際に心肺蘇生を体験してもらいます。それにより、理解度が向上します(写真9)。

④双方向型コミュニケーション

指導者からの受講者への一方通行の指導ではなく、言葉のキャッチボールをしながら積極的にコミュニケーションをとり、共同で学習している雰囲気を作ります(写真10)。

⑤フィードバック

講習で行った手技に対して評価を行い、結果を伝えて今後につなげてもらいます(写真11)。

(9)消防からのお願い

「人に物事を教えるプロ」である学校の先生方に心肺蘇生を教えることは、消防職員にとってはかなりのプレッシャーがかかります。かしこまらず、和やかに講習を行えるような雰囲気作りをしていたけると非常に助かります(写真12)。



写真9 実際に体験してもらいましょう



写真10 共同で学習している雰囲気を作ります



写真11 手技に対してのフィードバックを行い、今後につなげます



写真12 和やかな雰囲気作りをお願いします

謝辞

今回、『健康教室』で連載執筆の機会をいただき、本当にありがとうございました。自分の少ない経験で得た知識を文章にさせていただきましたが、読者のみなさんの日々の活動の中で、少しでも参考にしていただければ幸いです。大変お世話になりました。(炭谷 貴博)

本連載は年度替わり直前の提案企画で、駆け込みでページをいただいて始まったものです。編集部のみなさま、ありがとうございました。

先日、自宅までの道を歩いていたら偶然、女性が倒れているところに遭遇しました。読者のみなさまにも、『万が一』の時に、この連載が役立てば望外の幸です。(玉川 進)